

要 旨

日本の文化における蓮の観賞

田中 寛子

現代日本において蓮は「仏教」と関連する植物としてあげられることが多いであろう。だが、蓮は「仏教」以外にも「食用」「薬用」「観賞」といった面で日本人と深く関わっている。本論では「食用」「薬用」「観賞」「仏教」における蓮を再確認し、江戸時代までの日本人が蓮を文化的にどのように捉えていたか検討した。

まず第一章で、現代の日本における蓮がどのように捉えられているか再考した。現代日本においては「食用」としての蓮、「仏教」を象徴する植物として最も知られているが、「薬用植物」、「観賞植物」としての蓮も知られている。「観賞」では、「観蓮会」が現在でも開かれている。だが、中国文化の影響を強く受けての事である。

第二章では、「日本における蓮の歴史」として、「上代以前」「中古」「中世」「近世」と時代別に区分し、先に述べた四項目を中心に蓮の捉え方を考察した。「上代以前」から「食用」「薬用」「観賞用」としての蓮は見受けられたが、「仏教」との関係は「中古」から確認できる。

「食用」としては「蓮根」「蓮の実」が食されており、現代に通じる食用方法が確立されていることが改めてわかった。「薬用」としては中国本草学の影響下にあり、日本における名称が記されていたが、主治において日本独自の発展は発見できなかった。

「鑑賞」面では『枕草子』にも蓮の美しさについて述べられており、「近世」になると武家社会の園芸文化が盛んになったこともあり、多くの図譜が刊行され、中国からも蓮が輸入されている。「仏教」においては蓮に極楽浄土を投影していることが「中古」から述べられており、「中世」においては仏教儀礼にも用いられている。しかしながら、強く結びつきすぎたためか、その仏教臭さから否定的に捉えられることもあった。

一方で「蓮っ葉」と人の言動に対する意味が付与されるようになる。これは、「蓮

の葉」の商売期間、日常で利用するために「仏教」以外と関連付けられる要素があったことが考えられる。

以上の事から、蓮は歴史的に多角的に捉えられてきたが、「仏教」のイメージとして「蓮の花」が強くなり、「蓮の葉」は仏教儀礼にも使われていたが料理にも使用されていた。このことから、「蓮っ葉」に人の言動に対する意味が付与されるようになったのではないかと結論付ける。